



大学・  
法学部

## アメリカの外交史 ～その根源的な問題～

アメリカ外交史

にしきき ふみこ

西崎 文子 成蹊大学  
法学部教授



東京大学教養学部卒業。一橋大学法学研究科修士号取得。イェール大学歴史学部博士課程終了、博士号(Ph.D)取得。フルブライト奨学生、国際交流基金安倍フェロー。ハーバード大学、ラトガーズ大学、ケンブリッジ大学客員研究員など。1998年より現職。著書に『アメリカ冷戦政策と国連 1945-1950』(東京大学出版会)、『アメリカ外交とは何か』(岩波新書)など。

### アメリカとはどのような国か

アメリカには本当にいろいろな国が——アメリカを外から見て、そう思う人は少なくないのではないのでしょうか。素晴らしい物品を生産し、知識や技能にも優れ、多彩な音楽や映画で人々を魅了する力をもっているアメリカ。しかし、同時にアメリカは尊大で、自己中心的で、自国の経済的利益を強引に追求して世界を混乱させ、果ては戦争で各地に荒廃をもたらしながら自分たちは世界で一番の国と公言してはばかりません。私のアメリカ外交史



大阪 国立民族学博物館でのシンポジウムで

研究の根底には、このような矛盾がなぜ、どのようにに生じるのかを理解したいという欲求があります。言い換えるならば、アメリカとはどのような国なのかという大きな問いを背景に、アメリカの対外行動の特徴を分析するというのが私の問題関心です。その場合、アメリカ外交に見られる矛盾や逆説を解明するための一つの方法として、私が進めているのが、アメリカと国際秩序との関係に関する研究です。周知のとおり、ウィルソン大統領は、第一次世界大戦のときに国際連盟の創設を提唱し、これを実現に導きますが、肝心のアメリカはこの国際組織に加盟しませんでした。そのときの自国の行動を反省したアメリカは、第二次大戦中に新たな国際組織の結成を推進し、国際連合を創設します。国連本部がニューヨークに置かれたことは、国際社会の組織化こそが平和の礎であり、アメリカの国益にも寄与するという当時の新しい認識を象徴していました。



### アメリカと国連の関係

しかし、それから六十年あまりたって、アメリカと国連との関係は、良く言っても不安定であり、時としては敵対的のすべからずあります。日本政府が、たとえ建前だとしても、国連や国際世論を枕詞として日本の外交政策を説明しようとするのは対照的に、アメリカでは、国連の意向や各国の

世論の動向を重視する指導者はごく限られています。アメリカの政策と国連の決議とが対立する場合には、間違っているのは国連であり、アメリカは独自の判断で正しい政策を追求するのだと主張することすら珍しくありません。

### アメリカの自負、そして優越性

アメリカは、なぜ一方では自分たちが世界の利益を実現する使命を担うのだと主張しながら、他方では世界各地の多様な意見に積極的に耳を傾けようとしないのでしょうか。その背後には、自分たちこそが、近代民主主義の理念を掲げて誕生した「普遍性」を持つ国家であるという自負が、アメリカの優越性を裏付ける根拠としてとらえられ、アメリカのナショナリズムを煽ることにつながっているという「逆説」が存在するというのが私の見方です。



ニューヨーク大学M.ヤング教授を囲んで津田塾大学の藤田文子教授と

日本における「アメリカ体験」は、世代によって大きく異なります。戦争と占領を経験した世代、安保闘争の世代、ヴェトナム戦争世代、ポスト冷戦世代、そして今、私が教えているのはポスト9・11世代といえるのでしょうか。そのようなさまざまな「アメリカ体験」により、いながらアメリカ外交から見えてくる根源的な問題とは何かを考えていくのが、私の研究課題であり、また教育の課題でもあります。